

言語と心：
コミュニケーション能力と言語発達の視点から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻, 弘美 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4762

言語と心：コミュニケーション能力と言語発達の視点から

辻 弘美

大阪樟蔭女子大学人間科学部准教授

『犬には心があるのでしょうか?』こんな質問を、第7回心の相談コロキアムにおいて、「ことばの発達：その不思議なるもの」という題目でお話をさせていただいた後にうけた。これは大変難しい質問である。どのように答えようか。その答えは、おそらく誰がどんな立場で考えるかによって異なってくるであろう。正解は一つではない。もしくは正解なんてないのかもしれない。しかし、この質問について考えることは、私たちが当たり前で獲得しているにとらえている人間の言語と人間のこころとの関係をみつめる格好の題材ではないかと思われる。そこで、この質問への答えを考える中で、本稿では、言語と心の関係について、コミュニケーションと言語の発達の視点からにとらえていきたい。

I コミュニケーションと言語

コミュニケーションとは、2個体以上のものがシグナル(信号)を通して“何か”を伝達していくプロセスをさす。コミュニケーション的なやりとりや行動は、人間以外の動物間においても存在すると考えられる。たとえば、昆虫において言えばミツバチなどのダンスがそれであろう。しかし、ミツバチのダンスは言語とよべるとは言いがたい。なぜなら言語とよぶには、1)記号(何かを指し示すもの)と意味(何かを指し示されるもの)との間に社会的に規定された結びつきがある、2)文法などのルールにしたがって記号の組み替えが可能で、それによって無限の表現が可能になる、3)時間や空間を超えてものごとを表現することを可能にする(今井, 2004)、といった特徴を備えていることが必要であるからである。

一方で“コミュニケーションとは”という問いに対し、形式的には次のように述べることができよう。コミュニケーションには、情報の送り手と受け手の間に伝達のためのチャンネルがあり、送り手のメッセージは共有できる形式のシグナルとしてそのチャンネルを通して伝達される。その伝達されたシグナルは、受け手の方で解読されて、送り手のメッセージが伝わる(Shannon et al., 1949)。

この形式的なコミュニケーションモデルに加え、人間のコミュニケーションについていうならば、次の2つの特徴が注目できるであろう。一つには、人(発信者)と人(受信者)の間でその伝えられる“何か”を共有するための協調というものが必要であること。二つには、コミュニケーションが発達および教育的な要素をもっているということである(Adamson, 1996)。お互いの協調については、“いまここで”場を共有することや、感情を共有することとされている。一方で、教育や発達の要素としては、人と人の関係はいつも対称であるわけではなく非対称的な関係を有するということである。例えば親と子、教師と生徒である。“育むもの”といった視点をふくんでいてと考えてもよいであろう。これらの2つの要素をふまえて、コミュニケーション能力を我々人間がどのように獲得していくかについて、後に述べるとする。

人間にとってのコミュニケーションは、個体から他の個体への働きかけ(発信)に対し、働きかけられた個体からの応答的な反応があって初めて、メッセージを記号化したシグナルの流れがうまく成立するのではないだろうか。コミュニケーションには、単なるメッセージの伝達にとどまらず、その伝達自体をよりよくおこなうための人間の心理的な機能が様々な形で関わっていると考えた方がよいであろう。

次に言語であるが、言語はメッセージを共有するために符号化された記号の一つであるにとらえること

ができる。言語能力は発達の始めから完成されたものが備わっているわけではないが、人間のコミュニケーションとしての伝達においては、重要な役割をもっている。言語がどのような形で、人間のコミュニケーションの発達の中で生まれ、またその言語が、我々が人間として生きていく上でどのように重要であるのかについてみていくことにする。

II コミュニケーションの発達

コミュニケーションは、伝達に加えて、人と人の協調や発達教育的な要素を持つと先に述べた。ここでは、こういったコミュニケーションの発達について、Adamson (1996)にもとづき解説していくこととする。Adamson は、人間の初期のコミュニケーション発達を次の4つの段階にみる事ができるとしている。①生後直後から2ヵ月までの間には共有された注意が大人（親）と子の近接距離において存在する；②2ヵ月から6ヵ月までの間に対人的かかわりがみられる；③6ヵ月ごろから、親と子のやり取りの中に対象（事物、人、出来事など）が加わる。ここからが3項関係ともいわれるコミュニケーションの形態となる；④13ヵ月頃からは、言語のあらわれによって、正式な記号を用いたコミュニケーションが可能になってくる。

生後6ヵ月までのコミュニケーションをみてみると、親と子が互いの注意が向き合う中で、物理的に近い距離でのかかわりがみられる。子どもの対象に注意を向ける力は大人ほどの柔軟性が期待できないため、大人が子どもの注意を促し、その注意を保持できるような働きかけが必要となる。

一方で、生後6ヵ月以降には3項関係がみられるようになり、2者のコミュニケーションの内容として、親と子が共有しようとする対象についてのメッセージがあらわれはじめる。ここでは、まだこのメッセージが言語化されることはないが、子は、自分を取り巻く状況をよく観察し、身振りや視線、音声を巧みに使い自分の意図を伝えようとする。

生後9ヶ月から1歳の誕生日にかけて、指差しをはじめとする、表象ジェスチャーがみられるようになる。これらは前言語ともいわれ、正式な言語を表出する前の萌芽的なコミュニケーションの媒体としてもとらえられている。また、ジェスチャーとともに、子どもが大人と何かを共有したいという意図の現れが注視のありかたにも顕著に現れる。自分が興味をもつ対象を、他者も同じように見ているか、感じているかが気になり、他者の視線を確認するなどの共同注意がみられる。

生後13ヶ月ごろから、言語の産出がみられ始める。もちろん、子どもは階段を上るように身振りをを用いたコミュニケーションから完全に言語コミュニケーションに変化していくのではなく、言語（語彙や文法）の幅が広がるにつれ、言語による符号化を通してコミュニケーションを行う頻度が増えてくる。また、言語の産出が始まる時期は個人による差が大きくみられる。早咲きの子どもでは1才前から、遅咲きの子どもでは2歳以降というほどの大きな開きがみられる。

III コミュニケーションの枠組みからみた言語と心

ここまでは初期のコミュニケーション発達について概観してきた。これらの発達段階からは、メッセージの媒体としての言語が現れるようになることがコミュニケーションにとって重要な発達課題であるようにみえてきそうである。もちろん、人間としての言語を習得することの意義は大きい。しかし、人間のコミュニケーションでは、その媒体となる言語のみがあっても、伝えたいメッセージをうまく伝えることはむずかしいであろう。すなわち、人と人が協調して、そのメッセージがうまく伝わるようなかかわりが重要になる。そのかかわりのために必要とされるのが、わたしたちが一般的に言う“心”ではないであろうか。

心にはいろいろな機能がある。私たちが知識を蓄積していくことができるのも、心的機能があるからで

ある。他者が何をすでに知っていて、何を知らないのかとか、ある特定の状況では一般的に人はどのように行動するのかという典型的なシナリオ(スクリプトともいう)を、私たちは知識として身につけていく。これらも人間が社会的な環境の中で他者とふれあうことにより獲得していく心の成分といえる。

さらには、コミュニケーションの相手としての他者の心的状態をイメージし、他者の発話にこめられるメッセージを、言語外の情報を含めて解釈する必要がある。人間のコミュニケーションでは、何(どのような情報)がその場面での人と人のやりとりで最も関連があるのかといった判断と、その判断に基づいて適切に情報を処理する機能が重要であるとされている(例えば Sperber et al., 1986)。

人間のコミュニケーションの発達過程では、言語による符号化を行うことによりメッセージを伝えることができるまでには、生後1年を待たねばならない。それ以前のコミュニケーションにおいては、親もしくは大人の支援的な配慮によりコミュニケーションに必要な協調がはかられる。しかしながら、先述した発達過程から、子どもがもたらす心の発達はそれ以前からみられることがわかる。生後まもなくからみられる特定のものへ注がれる視線や、注意行動の柔軟性や適応性の発達、対象を操作する能力の発達の变化(Piaget, 1936/1952)は、子どもの認知的世界を広げるとともに、社会的な他者からの子どもへの支援のありかたにも変化をもたらすことになる。

これらの前言語期の子どもの心的機能の発達変化は、子ども自身のコミュニケーション発達のための基盤となるとともに、それを支える大人への働きの意味も大きいと考えられる。大人は、生後間もない子どもを、言語表出がないからといって、心がないというとらえかたをしてはいないであろう。もちろん、文化や地域社会によって子ども観の差異は存在するであろうが、一般的に私たち大人は、人間の子どもの生まれた時から心を持った存在としてかかわっている。心というものを広い意味でとらえると、生後の発達は多くの心が心の発達にかかわっているといつてよいことになる。すなわち言語の表出がされない段階でも心はあるのである。

しかし、犬などの動物、もしくはミツバチといった昆虫はどうであろうか。冒頭でのべた、言語の定義から考えると、これらの生物が人間と同じレベルの言語を所有しているとはいいがたい。では、心はどうであろうか。ある生物が同種の他個体の行動を推測するとき何をもとにおこなっているのか、人間のような心的な表象に基づくのか、それとも、行動の繰り返しパターンによるものか。コミュニケーションが個体間で成立する際に、どのような協調的な相互作用がおこなわれているかを問うてみる必要があるだろう。

本稿では、冒頭の質問を心と言語を考えるきっかけとして取り上げ、人間の言語と心との関係をコミュニケーションという枠組みから考えてきた。人間の場合、コミュニケーションには言語と心の発達の両者が不可欠であることは否定できないであろう。心の発達は、言語の表出前からわれわれの目に見えるかたちであらわれている。初期の発達過程では、心の発達は言語の発達を支えているようにとらえることができよう。しかし、人間の発達を生涯的な視点からとらえると、言語のチカラはわれわれの心をより人間らしく生きるための大切な道具として欠かせないことも忘れてはいけない。Vygotsky (1934/1962) は、言語を文化的な道具であるといったが、まさにこの捉え方が、人間が社会的な生活を営んでいく上で言語が欠かせない役割を担っていることを表しているともいえる。言語がわれわれの心を始めからつくるわけではないであろうが、言語を使うこと、とくに言語の定義にあったように、言語はその機能を巧みに組み合わせる(文法のチカラ)ことにより、無数の意味を作り出すことができるすばらしい道具である。また、言語を介することにより、初期のコミュニケーション発達にみた“いまここで”的な文脈にとどまらず、過去や未来を指し示し、その時間や空間の軸に沿って、情報をコミュニケーションの相手と交換できるのである。言語をつかうことにより、われわれの心はいっそう研ぎすまされ、より人間らしい心を育むことにつ

ながると考えられる。

さて、もう一度始めの問題にふりかえてみることにする。「犬には心があるのか？」犬は人間のような言語システムの知識をもっていないし、それを表出するだけの器官も備わっていない。しかし、人間の乳児期のコミュニケーション発達で先述したように、言語の表出が見られない場合に心が全くないとは言えない。ではどの程度、犬に心が存在するのかという問題になる。人間のもつような言語システムが犬にはないという前提からすると、言語によって洗練される心という方向性での心の発達を期待することは難しいであろう。おそらく、人間が言語を用いることによって洗練させていく程度の心は残念ながら犬にはないであろう。

IV まとめ

本稿では、この「言語と心」の問題を取り上げることによって、人間にとっての言語の役割を発達の視点から考えてきた。言語と心の関係については、様々な視点から議論をしていくことが可能であろうが、ここでは、特にこの問題を通して、いかに人間の言語が我々をより人間らしくしていくかについて注目したいと考えた。言語の習得は人間にとっては大きな発達課題ではあるものの、言語が持つ形式的な知識の獲得（話す、理解する、読む、書くなど）に偏ってとらえられることも少なからずある。もちろん、様々な教育の場面で、形式的な知識としての言語の習得も重要であるが、もっと広い意味でわれわれが得た言語能力というものをとらえていくことが大切であろう。“心を豊かにする言語”という視点では、我々人間は、生涯にわたって言語の発達を遂げているといってもよいであろう。しかしながら、だからこそ、その人間らしさの始まりの発達は重要な意味を持っているのである。

近年日本でも紹介された「語りかけ育児」(Ward, 2001)の著者サリー・ワード氏は、次のような表現で言語の捉え方を示している—“言語は子どもへの最良の贈り物”。子どもの発達を支援する立場、見守る立場、それぞれの立場の者が、どのように人間の言語をとらえるかによって、子どもとどのようにかわり支援するのも変わってくるのではないだろうか。

文献

- Adamson LB (1996) : *Communication development during infancy*. Colorado: Westview Press
- 今井邦彦 (2004) : なぜ日本人は日本語が話せるのか —「ことば学」20 話 大修館書店
- Piaget J (1936/1952) : *The origins of intelligence in children*. New York: International University Press
- Shannon CE, Weaver W (1949) : *The mathematical theory of communication*. Urbana, IL: University of Illinois Press.
- Sperber D, Wilson D (1994) : *Relevance: Communication and cognition (2nd ed.)* Oxford: Blackwell.
- Vygotsky LS (1934/1962) : *Thought and Language*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Ward S (2001) : *BabyTalk: Strengthen Your Child's Ability to Listen, Understand, and Communicate*. London: Arrow Books
- 榎 朝子 (訳) (2001) : 0~4 歳 わが子の発達に合わせた 1 日 30 分間「語りかけ」育児 小学館